

御国の完成に関する黙想

— 真夜中の祈りと憐れみに生きる者の整え —

鈴ヶ峰キリスト福音館

聖書研究会 考察

2025. 9. 5

ルカの福音書 11 章

真夜中の友人のたとえの奥行きを正しく捉えたい。

主が弟子たちに「御国の祈り」を教えられた直後に語られた「真夜中の友人のたとえ」は、祈りの本質と御国の実現の関係を展開しており、願う者の姿勢と応える神の憐れみを通して、御国の完成へと向かう道筋を描いています。

「あなたがたのうちのだれかが、友人のところへ真夜中に行って、『友よ、パンを三つ貸してくれ。旅の途中で私のところに来た友人がいるが、何も出すものがない』と言ったとします。その人は家の中から、『もう遅い。戸は閉まっているし、子どもたちも寝ている。起きて何かをあげることはできない』と答えるかもしれません。しかし、言っておきます。彼が友人だからという理由ではなく、しつこく頼むので、起きて必要なものを与えるでしょう。」(ルカ 11:5-8)

真夜中 = 霊的な危機と孤独

真夜中は、人間の助けが届かない時間帯。祈りが最も切実になる霊的な闇夜。

御国の完成に向かう道の途上で、霊的な夜が必ず訪れる。

友人の訪問 = 使命と応答

旅人が突然訪れるのは、予期せぬ霊的な使命や必要が訪れるさま。

パンを求めるこの者は、自分の手には何もないが、他者のために神に願う。

これは、終末の宣教者(花嫁)の姿にも重なります。自らのためではなく、他者のために神に近づいている。

しつこさ=信仰の持続と御国の突破

「しつこく頼む」と訳されるギリシャ語は、恥を恐れない大胆さ、遠慮のない信頼を意味する。

これは、神との関係における深い親密さを示しており、御国の完成に向けて、遠慮なく神に迫る姿勢。

花嫁の祈りとしてのたとえ

このたとえは、花嫁が整えられる過程で、他者のために神に迫る祈りの姿にも見える。

御国の完成に向け、真夜中でも神に頼り、大胆に願い続ける者の姿。神はその信仰に応えて、必要なものを与えられる方。

必要に応える方、主。そして、私たちの適用

「真夜中の友人のたとえ」における応答の態度は、2面性を持つ教えと思われます。主の応答の確かさを保証し、「あなた方が」祈りの姿勢を学ぶと同時に、主の御性質に与る者に相応しく整えられる「友となる者」の態度です。

「求めなさい。そうすれば与えられる。探しなさい。そうすれば見つかる。たたきなさい。そうすれば開かれる」(ルカ 11:9)

祈りに応えてくださる神が、真夜中であっても、戸が閉まっても、起きて与えてくださる。私たちに対して、どのように祈るべきかを教えます。

それと同時に、神の憐れみの性質が祈りを通して私たちの地上の関係の中に現れるものとして描かれていきます。

求める者は、自分のためではなく、旅人のためにパンを求めています。

他者の必要に応答しようとする姿勢。

自分のうちに何も無いものが祈り、憐れみの実際に身を置き、神の憐れみを求めて引き出す行為。その話の中で、友人は「もう遅い」「子どもたちも寝ている」と言いますが、それでも最終的には起きて必要なものを与えます。このたとえば、花嫁(教会)が整えられていく過程で、憐れみを求める者として立つ姿を描いています。

それと同時に、この世の中で、教会の交わりの中に、そして人の歩みの中に顕される「主のわざ」として憐れむ者として主の御姿が人のうちに顕される2面性を教えています。

主の御性質のゆえに、求める者に与えざるを得ない御心を主は持たれますが、与える業が顕れるのは、私たちの現実の中で憐れみの実際の行為が生じるものとして描かれます。それは、この世又は教会の交わりの中に、そして花嫁の整えの中に現れる形ある行為です。

主が与えられたもの(主の御霊、主により与えられた命とその祝福、神の御性質である愛、あわれみという主の徳)が、主の証において地上において完全に顕され、主の御支配の領域として定着することはこの地における御国の到来を意味します。ここでは、神の憐れみが神の教会の中に完全なものとして顕現するのであれば、御国は完成したといえます。しかし、主が迎えに来られるまでは、花嫁は整えられる過程の中にあり、御国の完成を待ち望んでいます。

その意味で、主のわざは私たちが「与えられた」だけで終わるのではなく、この世において、教会の中にそして花嫁とされた者の歩みにおいて、キリストご自身の似姿が顕されるために与えられるのです。

主の憐れみが形を持ち、主の臨在が場を支配し、主の愛の証しとなる——御国の完成は、その顕れが満ち満ちた時です。

真夜中にしつこく願われたほうの「友人」の姿は、神の応答なさるご本質を学ぶためだけの象徴ではなく、私たちの地上の関係性の中での行為を映す教えでもあります。「憐れみ」の体現とは、神の性質からの善を受容するだけのものではなく、そのご性質の中に私たちがどう生きるかを問われる場となります。

友は、最初は拒む者として描かれています。

「もう遅い。戸は閉まっている。子どもたちも寝ている。起きて何かをあげることはできない。」

この姿は、人間の限界や自己中心性を象徴しています。

しかし、最終的には「しつこく願われたゆえに」起きて与える。これは、憐れみが他者からの願いによって引き出される姿です。

たとえ話の中で、友人は「友人だから」ではなく、「しつこく願われたから」応答します。これは、人間関係の関係性よりも、憐れみの動機が優先されて応答していることを示しています。

祈る者の姿だけでなく、同時に願われる者としての姿も教えています。私たち自身が、願われる側にもなる立場で、憐れみの応答において、しつこい要請を受けながらも、最初は関心を払わなかった者が次第に整えられて応えていく者とされる姿を示します。

誰かが私たちに「パンをください」と願うとき、私たちは「もう遅い」と言うか、「起きて与える」か——その選択の中で、憐れみを体現する者として整えられていくのです。哀れみについてこの2面性を覚えることとは、終わりの日の御国の完成に向けて、花嫁として整えられる教会の姿についてです。花嫁は、キリストに願う者であると同時に、世に対して憐れみを体現する者として、応える者にもなっていくのです。そこで求められていたのは、真夜中における隣人のための命のパン※(主の祈りで願うべきものとされた糧)なのです。

主が弟子たちに「御国の祈り」を教えられた直後に「真夜中の友人のたとえ」をされたことは、祈りの本質と御国の実現の関係を示しています。願う者の姿勢と応える神の憐れみの御性質を示して、御国の完成へと向かう道筋を描いています。

そして、御国の祈り、真夜中の友人のたとえ、憐れみの体現——に続いて、聖霊が与えられることについて説かれており、その流れには意味があります。

ルカ 11 章の構造：祈りとたとえの連続性

内 容	霊的意味
1-4 節 主の祈り（御国の祈り）	御国の秩序と願いの構造
5-8 節 真夜中の友人のたとえ	御国を求める者の姿勢と憐れみの体現
9-13 節 求める者への約束	聖霊のご支配 御国の秩序(祈りの応答としての臨在)

1. 「御国が来ますように」＝御霊の支配の始まり、真夜中に願う者の姿勢

御国の祈りの中心は、「御国が来ますように(みこころが天で行われるように地でも行われますように)」という願い。

御国の到来とは、神の霊が人の内に宿り、神の秩序が地上に現れることです。

御霊は、神の国の秩序を内側から形づくる神の霊(力)です。そして、御国の祈りとは、赦しと一致であり、御霊の支配を願う者の応答です。

真夜中にパンを求める者は、自分のうちに何も無いが、他者のために御国の糧を願う者です。

これは、御国の到来を切実に求める者の姿勢と言えます。

2. 「日ごとの糧を今日もお与えください」＝パンを求める祈り

パンは、キリストの体であり、命の糧です。御霊は、キリストの命を私たちに生きさせる内住の主です。真夜中にパンを求める者は、御霊による命の供給を他者のために願う者。

真夜中の願いは、まさにこの「日ごとの糧」を求める祈りの実践でもあります。

御国の祈りは、他者の必要に応答する祈りとして、たとえが続いていきました。

3. 「赦し」＝御霊による一致と憐れみの応答

たとえの中で、願われた者は最初拒むが、最終的には応えるようになりました。

これは、不完全な人間の間(教会)で、憐れみが引き出され、赦し(愛、とりなし、ほどこし)が形になる瞬間です。ここでは主の弟子たちに教えられた御国の祈りに呼応するので、「赦し」として理解することがふさわしいと考えます。

御霊は、私たちの内を探り、赦しを可能にする方です。憐れみは主の御性質であり、憐れみの体現は、主の霊である御霊によって整えられるものです。

願われた者が応える姿は、御霊に導かれた憐れみの実践です。

御国の祈りの「私たちの罪を赦してください。私たちも私たちに負い目のある者をみな赦しました。」は、憐れみの体現として応える者の姿にも重なります。

御霊が与えられる：祈りの応答としての神の臨在

ルカ 11:13「まして天の父は、求める者に聖霊を与えてくださる。」

この言葉は、祈りの教えの締めくくりとして語られます。それは、祈りの目的が物質的な満たしではなく、神ご自身の臨在であることを示しています。

御国を求める者の神への大胆な憐れみの祈りの先に、御霊による主の御支配・臨在を得、赦しと憐みの中に生きる。主の御前に相応しく整えられるべき者たちが、キリストの御霊によって愛と赦し、その憐みの御性質において整えられていき、求める(祈る)者のうちに宿る聖霊が、主の憐れみを体現させ、神の臨在によって、主ご自身の栄光が地上に顕されます。

主の教えられた弟子たちへの祈りは、御霊を求める祈りであり、真夜中のたとえば、御霊によって憐れみを生きる者の姿であり、そして、御霊が与えられることは、御国の到来のはじまりです。

次のエピソードは、悪霊の追放と神の国の到来に関する議論(11:14-28)です。ここでは、御国の力が現れるときに起こる霊的識別と応答の問題(※補足 1)が描かれています。

1. 口をきけなくする悪霊の追放(11:14)
2. 神の指によって悪霊を追い出されることによる神の国の到来の証し(11:20)
3. 強い者ともっと強い者のたとえ(11:21-22)
4. 空になった家に戻る霊(11:24-26)
5. 御言葉を聞いて行かう者の祝福(11:27-28)

これらのエピソードは、祈りと憐れみの体現の後に、御国の力が現れたときに人がどう応答するかを問う場面です。

憐れみと信仰の関係

癒しの目的は主を迎え入れるものとされること(神の御霊の臨在)です。

憐れみは、神の愛の現れであり、人を招くための入り口・扉です。

癒しは信仰への招きであり、信仰は神の聖霊を迎える(臨在)ものとして導かれます。

信仰の応答がなければ、その扉は開いたまま、誰も住まない家ようになってしまいます。

人の苦しみの叫びに対して、主は憐れみ深く、癒しを与えられます。主は、癒しを通して人を神への生ける信仰へと導こうとされています。しかし、憐れみの働きが信仰に結びつかないときの霊的危機があります。み言葉を聞いて応答しようとしなければ、癒しは一時的な慰めにとどまり、空の家に戻る霊のように、主御自身を迎え入れない状態で別の主人(王)を迎え入れるべく霊的な玉座が空いたままとなり、破れは繰り返されるのです。

他者の祈りや、力ある者の祈りによって人が癒されることはあります。しかし、それは神との関係の代替にはなりません。他者のゆえにではなく個人的な主への信仰の応答によってのみ、御霊の御支配へと人の命を導きます。

この場合、応答を拒絶する者に対して、憐れみのときは、いつまで求め、いつまで期待できるでしょうか。終わりの日の御国の完成を求める学びでは、花嫁の整えられるときのことを主の日の終局として覚えてきました。キリストご自身が私たちにくださったように、罪人の隣人に対する、際限のない愛を学びます。憐れみのときはいつまでか。その日、その時は、私たちの選択する事柄(私たちに置かれた主権)ではなく、聖であられる主の主権です。その「時」は主の定めの時です。その時を私たちは知りません。

1. 神の憐れみは永遠の性質を持つ

哀歌 3 章 22-23 節「主の恵みは尽きることがなく、その憐れみは絶えることがない。

それは朝ごとに新しい。あなたの真実は力強い。」

神の憐れみは、ご自身の性質として永遠に存在するもの。花嫁が整えられる過程の地上の歩みの中で、罪人に対する忍耐と招きとして存在し続けるものです。

(赦しの期間: マタイの福音書 18 章 21-22 節 そのとき、ペテロがイエスのところに来て言った。「主よ、兄弟が私に対して罪を犯した場合、何回赦すべきでしょうか。七回まででしょうか。」 イエスは言われた。「七回まで、などとはわたしは言いません。七回を七十倍するまでです。」)

2. しかし、憐れみは「悔い改めに導くための時」として備えられた神の限定される時でもある

ローマ 2:4-5 それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現れる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。

ここでは、憐れみは目的を持った時間的猶予として語られています。つまり、憐れみは「いつまでも」ではなく、悔い改めに至るための「今」に与えられているものです。

ルカ 13:6-9 の「実を結ばないいちじくの木」のたとえも、憐れみの延長が実を結ぶかどうかによって終わりを迎えることを示しています。

赦しの回数である 7 の 70 倍もまた、ヘブライ語では「70 週」を指す同じ原語であり、この 70 週とは、主の裁きの主の日に至るまでの期間と同義であるとも言えます。

花嫁の整えと憐れみの限界

花嫁の愛は無限か

花嫁（教会）は、キリストの愛を体現する者として、不完全な罪人に対しても憐れみをもって接する使命を持ちます。

しかしその憐れみは、悔い改めと命への導きが目的です。愛は無限であっても、その愛が届かないまま拒絶され続けるなら、主の表れの時に裁きの根拠となりました。

マタイの福音書 25 章 31-46 節（羊と山羊のたとえ）

「人の子は、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを従えて来る。そして、その栄光の座に着く。…彼は羊を右に、山羊を左に分ける。」

この場面では、終末においてすべての人が神の御前に集められ、義人と悪人に分けられます。右の者には永遠の命、左の者には永遠の刑罰が与えられます。憐れみの時が終わり、選びが確定する終末の瞬間を示しています。

憐れみは、悔い改めに導くための「今」という時の中で働くものです。花嫁は、無限の愛を体現しつつも、命に至る応答を待ち望む者として整えられていきます。

それゆえ、憐れみの場は「いつまでも」ではなく、「今こそ、悔い改めよ」と語る終末の証言の中で限界を迎えるのです。

私たちは常に今を生きており、主の日は、主によってのみ、主だけが知られる時として定められています。人には知らされず、計算も予測もできない、神の主権の中に隠された時です。

1. 今を生きる者の姿勢：目を覚ましていること

マルコ 13:32-33 「ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。気をつけなさい。目をさまし、注意していなさい。その定めの時がいつだか、あなたがたは知らないからです。」

主の日がいつ来るかは知らされていない。だからこそ、今という時に忠実に生きることが求められる。

2. 主の日は主の主権の中にある

使徒 1:7 イエスは言われた。「いつとか、どんなときとかいうことは、あなたがたは知らなくてもよいのです。それは、父がご自分の権威をもってお定めになっています。」

主の日は、人の計画や予測を超えて、神の主権の中にある時。

3. 今の忠実さが、主の日の備えとなる

ルカ 12:37 帰って来た主人に、目をさましているところを見られるしもべたちは幸いです。

今をどう生きるかが、主の日にどう立つかを決定する。

今は憐れみの時、主の日は完成の時

私たちは常に「今」を生きています。その「今」は、憐れみが流れ、悔い改めが招かれ、証しが語られる時です。そして、「主の日」は、その憐れみが完成し、花嫁が迎えられる時です。それは、主によってのみ定められています。だからこそ、私たちは「今」において、目を覚まし、整えられ、主の来臨を待ち望む者として立つのです。

さらに突き詰めていえば、目を覚まして祈るべきことを教えられたあのゲッセマネの祈りは、主イエスが、主を否むまだ罪びとであったこの世の者たちの救いのために、ご自身の命を贖いの代価としてささげられた贖いの御業を実現するために、罪の世と一つに結ばれて、ご自分の命を捨てられた、地上に遣わされたしもべとして歩みを遂行するためのものでした。それが、目を覚まし祈り続けられたことの果たされた結末です。目を覚ます祈りの働きは愛と憐みの体现でした。このことは、この罪の世が最終的に贖われるための、終わりの日の神の民の贖いのため(御国の完成のため)に、「主の日」の花嫁の整えと関係します。主の忠実なしもべの愛の極みが到達する先は、悔い改めにより命に至らせる(復活の命の共有の)ための苦難(死)の共有でした。

(※補足 1) 霊的識別と応答について

イエス・キリストの語られる言葉と、憐れみの御業に対して、人がどう識別し、どう応答するか—その選びが、いのちの祝福に至るかどうかの分岐となっています。

1. 口をきけなくする悪霊の追放 (11:14)

識別：この癒しは神の憐れみの現れか、それとも別の力によるものか。群衆の中には驚きつつも、ベルゼブルによるものと誤認する者がいる (11:15)。

応答：正しい応答は主の証を認め、賛美する。

2. 神の指による悪霊の追放 (11:20)

識別：この力はどこから来るのか、神の国の到来を告げるものか。

応答：「神の指」という表現は、神の直接的な介入を示す。識別できる者は、神の国が「今ここに」来ていることを悟り、主のことばを受けとる。

3. 強い者ともっと強い者のたとえ (11:21-22)

識別：誰がこの霊的戦いの主なのか。誰が「もっと強い者」なのか。

応答：キリストがサタンに勝利する事実を見抜けるか。識別できる者は、解放された魂において、勝利の後に何が満たされるべきかを問う。

4. 空になった家に戻る霊 (11:24-26)

識別：解放された後、何によって満たされるべきか。

応答：悪霊の追放で完結せず、空虚なままとしてではなく、神の言葉と霊によって満たされる必要を悟り、主のことばを受け入れる。

5. 御言葉を聞いて行う者の祝福 (11:27-28)

識別：祝福はどこにあるのか。感嘆か、応答か。

応答：単なる感情的賛美ではなく、御言葉に応答して行う者が祝福される。識別できる者は、神の言葉の霊的重みを受け止める。

続いて学ぶエピソードは、「しるしを求める者たちへの主の応答」です
これは、神のわざを見ながらも悔い改めに至らない心の姿勢への警告でした。
与えられる唯一のしるしは、ヨナのしるしです。

主は「この世代にはヨナのしるしのほかには与えられない」と語られました (11:29-30)。

ヨナのしるしとは、死と復活の型です。ヨナが三日三晩大魚の腹にいたように、主イエスも墓に入り、復活されました。

また「ヨナのしるし」は死と復活の型という表現だけに収まらず、ヨナがニネベに現れたように、復活のキリストが異邦人の中に現れ、悔い改めを引き起こすという、終末の啓示的な神の御計画を覚える憐みの顕現です。神の民ユダヤ人にとって「ヨナのしるし」は「妬みを引き起こす」しるしとなるという視点が隠されています。(※この解釈・講解メッセージは知られていない)

1. ヨナの死と復活の型＝人の子のしるし

ヨナが魚の腹に三日三晩いた後、ニネベに現れたことは、深淵(死の黄泉)から戻った人の子が敵の民のうちに現れ、悔い改めを引き起こす型。

主イエスはこの型を「人の子のしるし」として語られ、ご自身の死と復活が異邦人の中に証されることを予告されました (ルカ 11:30)。

2. 異邦人の悔い改め＝終末の憐れみの顕現

ニネベの民は、ヨナの説教によって悔い改め、神の憐れみを受けました。これは、異邦人がキリストの復活の証しによって、神の憐れみに応答し悔い改めに至る型です。

主は「ニネベの人々がこの世代を裁く」と語られました (11:32)。

これは、異邦人が悔い改めに応答し、神の民の不信仰を証言することによります。

これがユダヤ人の妬みを引き起こす終末的逆転として描かれます。

ヨナのと看、この憐れみがあらわされたとき、ヨナは怒りました。神の民にではなく、「我が同胞」を迫害する敵に救いが届けられ、許しがたいほどの深い主の憐れみを実現したからです。

3. ユダヤ人の妬み＝ローマ書の終末的逆転構造

主は、奇跡や癒しを見てもなお「しるしを求める」者たちに対し、「悪い世代」と断言されました。これは、神のわざを見ながらも悔い改めに至らない心の姿勢への霊的警告です。しかし、この悪い時代に唯一残された人の子のしるしはヨナのしるしでした。

主は「ヨナがニネベの人々のためにしるしとなったように、人の子もこの時代のためにしるしとなる」と語られました（ルカ 11:30）。

神の憐れみが拒絶された者に届き、拒絶した者をも回復するという、十字架の逆説的愛の完成図を見据えておられます。しかし、この時代に対しては嘆かれるほかありません。

ローマ 11:11

異邦人の悔い改めと救いは、ユダヤ人に霊的な妬みを引き起こします。それは、彼ら自身が再び神に立ち返るための憐れみのうちに閉じ込める神の御計画でした。

終末の憐れみは、異邦人を通して神の民に再び届くことを示しています。

ルカ 11 章とローマ 11 章の一致

しるし	ヨナのしるし＝死と復活	復活のキリストが異邦人に現れる
応答	ニネベの悔い改め	異邦人の悔い改めと信仰
裁き	ニネベがこの世代を裁く	異邦人の信仰が神の民に妬みを起こす
憐れみ	しるしは悔い改めへの招き	終末の憐れみが異邦人を通して神の民に届く

この構造は、神の憐れみが拒絶された者に届き、拒絶した者をも回復するという、非常識なまでの贖いの愛です。復活のキリストが異邦人の中に現れ、悔い改めを引き起こし、神の民に妬みをもって再び招きを与えるという、神の憐れみの逆転構造です。

そして、ヨナのしるしを唯一のしるしとして、ユダヤ人に残されていることが示されていることは、異邦人の証が彼らのうちに光となって関与するときがあることを示していると考えます。終末の憐れみがどのように異邦人を通して神の民に届くかを、ヨナのしるしを通してみるなら、その神の赦し・贖いの愛がキリストの栄光として彼らの中にどのようにあらわされるのでしょうか。それが花嫁の整えと関係すると信じます。

この憐れみは、裁きの前に響く最後の証言であり、花嫁の証しと重なります（あるいは、御国を求める祈りの中で警えられる真夜中のパンの懇願のことかもしれません）。ここにこの世が贖われるために神のしもべの受ける苦難と忍耐があります。主の迎えられる日の前触れとして地上に主の愛の御姿の写しとして顕れる神の栄光です。

続いてルカ 11 章の 37 節から始まるエピソードは、主イエスがあるパリサイ人の家に招かれ、食事の席で語られた霊的識別の言葉です。外側の清さと内側の腐敗、宗教的権威者への警告、そして預言者の血を流した世代への裁きが語られます。

パリサイ人は墓のように、見えないところで人を汚す存在となっている

これは、宗教的権威者が悔い改めを拒み、証しを妨げるためです。証しを拒み、悔い改めの道を塞ぐ者への終末的警告が語られます。

人に重荷を負わせ、自分是指一本触れない

預言者を殺した者たちの墓を建てて飾る

知識の鍵を持ちながら、それを閉ざし、他人の入り口も塞ぐ

ルカ 11:41

「しかし、内にあるものを施しなさい。そうすれば、すべてのものがあなたがたにとって清いものとなります。」

断罪の言葉が続く中で、主は突然こう言われます——『内にあるものを施しなさい』。この語り口の転換に、私たちは思わず立ち止まるような感覚を覚えます。

裁きの語調の中で、具体的な憐れみの行為を命じられたことに、どこか戸惑いを感じるのです。

しかし、この違和感こそ、断罪の只中に差し込まれた主の憐れみの招きであり、「今」という時に開かれている悔い改めの入り口なのだと思います。

「内にあるもの」＝心の中の誠実さ・真実

これは、物質的な施しのことだけでなく、心の中にある誠実な応答、憐れみの実践を意味します。外側の儀式ではなく、内側から湧き出る憐れみの行為。

「施しなさい」＝悔い改めに相応しい実を結ぶ行為そのものです。

強奪と邪惡に満ちていた内側が、憐れみの行為によって、内側から施すことで、清められていく可能性があるとの示唆だと思います。

「すべてが清いものとなる」＝主の視点での転換です。

41 節は招きです。

終末のしるしを拒む者にも、今という時に悔い改めの道が開かれていることを知ります。

内側が強奪と邪惡とでいっぱい、と言われた人たちでした。

「強奪」から「施し」への反転の提示は、神の国の御業(主のしようとされていること)への回帰を意味します。

「強奪 (ἀρπαγή)」の意味は、略奪、むさぼり取ること、暴力的な奪取を意味します。単なる物質的な貪欲ではなく、他者の命・尊厳・祝福を奪う靈的姿勢です。

「強奪」と「施し」の特徴は以下のような状態です。

	【強奪】	【施し】
物質	富や名誉をむさぼる	自分の持つものを分け与える
人間関係	他者を支配・利用する	他者を尊重し、仕える
神との関係	神の恵みを当然のものとし、奪うように扱う	神に感謝し、恵みを分かち合う
姿勢	自分中心奪う者として生きる	神中心、与える者として生きる

「強奪」は、靈的に見れば、神の恵みを自分の力で握り操ろうとする姿勢であり、他者を犠牲にして自分を高めようとする、サタンの支配の姿です。

主イエスが語られた「施しなさい」という言葉は、サタンの道とは真逆の、主の御霊の促す、つまり神の国の秩序に回帰する道を示しています。

ああ、という嘆き。

ルカ 11 章で繰り返される「わざわいだ」(οὐαί) は、単なる断罪ではなく、預言者的な嘆きの語調を持っています。預言者たちが、神の民の墮落を見て嘆いたときの言葉です。

「わざわいだ」という主の言葉は、「自分で悔い改められない」「縛られている」「立ち返れない」——ただの頑なさではなく、靈的な捕囚状態となっている指導者たちに対す深い嘆きと憐れみのうめきでもあります。主は、悔い改めに至らない者たちを前にして、裁きの言葉を語りながら、心において「どうして帰ってこないのか」と嘆いておられます。

何が彼らを真理から遠ざけて奴隷にしているのか。

1. 律法の重荷と自己義認

自分の正しさを守ることに縛られ、神の憐れみに身を委ねることができない。

「自分で悔い改められない」者になっています。悔い改める必要を感じられない靈的盲目の中に生きています。人々に尊敬される立場にある者が、弱さや罪を認めることができない。悔い改めが「恥」となっています。

2. 証しを拒む靈的態度

預言者を殺し、知識の鍵を閉ざす者たち。神の語りかけを拒み続けた結果、心が固くなった状態のものです。

では、どうすればいいのか。嘆きの中に残された道があります。

——「内にあるものを施しなさい」ルカ 11:41

これは、悔い改めの道がまだ残されている響きがあります。

なぜ急に「施すこと」を命じられたのか。施すことは、神の憐れみを実践することです。

そのことによって、心が開かれる可能性があります。

悔い改めに至れない者にも、神の業である憐れみの行為を通して、神の国の光が差し込む道が残されているということではないでしょうか。

嘆きの中にある憐れみの招き

「自分で悔い改められない者」に対して、主は「わざわいだ」と語りながら、その言葉の奥に、「ああ、帰ってきてほしい」という嘆きと憐れみの叫びを込めておられます。

憐れみの扉がまだ閉じられていないことの証しです。そして、施し——憐れみの行為——を通して、その人自身への神の憐れみの扉が、内側から開かれる可能性を持っています。では、心の内側が変えられていないものが、そう、(宣言)することは、みこころに叶うのだろうか。このことは赦しについても、同様に考えます。

行為と心、赦しと悔い改め、そしてこれは、神の憐れみに関する御国の支配と人の応答に関する霊的な事柄です。

施しと赦し：行為が心を導く可能性

1. 施しは、心の変化の結果であると同時に、心を変える道でもある

ルカ 11:41 「内にあるものを施しなさい。そうすれば、すべてが清いものとなる」

ここでは、施し(憐みの実際)が清めの道となることが語られています。

つまり、心が完全に整っていないくても、憐れみの行為を通して、神の国の秩序に触れるのです。

「私の隣人とは誰ですか。」「あなたも行って同じようにしなさい(憐れみを行いなさい)」

施しは、神の愛の御性質に自らを置く行為であり、その流れ(主の御旨の御支配)の中で、人の心が整えられていく可能性があると思います。主の命令に従って、主の言われたとおりの場所に身を置くものが、主によって為した行為のゆえに主からの報いを受けないことが、想像できるだろうか。主がその人の心に触れ、その人のきよめられることを望まれないことがあるだろうか。人の業には清さはなくても、人のうちをきよめる主の言葉が与えられている。

2. 赦しもまた、心の整いを待つのではなく、先に宣言されることがあります。

主の祈り：「私たちの罪をお赦しください。私たちも人を赦します」

ここでは、赦しが先に宣言されることによって、神の赦しの流れに入る姿が示されています。

行為	心の状態	みこころとの関係
施し	心が整っていないくても	神の哀れみの御性質の中に身を置く。 人の道は御心にかなう機会となる
赦し	感情が追いついていないくても	神の赦しに倣う姿勢として叶う
宣言	信仰が揺れていても	神の真理に応答する意志として尊ばれる

主は、「完全な心」が来るまで主の命令に背き続けるよりも、「応答する意志」を尊ばれる方です。主に応答する小さな忠実の信仰の種が、神の国の実りへと育つことを主は期待しておられると思います。

心が整っていないくても、施しや赦しを宣言することは、みこころに叶う応答であることは明らかです。それは、神の憐れみのみ旨に自らを置くことであり、その流れの中で、その人自身の心が整えられ、悔い改めが深まり、赦しを実を結ぶものとして導かれるからです。

その意味で、主は、「今」主の言葉に応答する者を喜ばれます。その応答が、やがて心の奥深くまで届くことを期待しておられるのです。

ルカ 11 章の流れを整理します。

◇ 1-4 節：主の祈り（御国の祈り）

「御国が来ますように」「日ごとの糧」「赦し」——これは、御国の秩序を願う者の祈りの型。

この祈りは、神の臨在と憐れみが地上に顕れることを求める入口。

◇ 5-8 節：真夜中の友人のたとえ

他者のためにパンを求める者の姿は、花嫁の証しの型。

これは、憐れみを体現する者が、御国の糧を求め、携えて証しする構造。

◇ 9-13 節：求める者に聖霊が与えられる

聖霊は、御国の臨在そのもの。

祈りと憐れみの実際の体現により、神の霊が与えられ、証しの力が注がれる。

◇ 14-26 節：悪霊の追放と神の国の到来

しるしを見ながらも信じない者の姿。

「空になった家に戻る霊」＝臨在を拒む者の霊的危機。

◇ 27-28 節：御言葉を聞いて守る者が幸い

しるしよりも、神の言葉に応答する者が御国に属する者。

証しに応答する者と拒絶する者は分離される。

◇ 29-32 節：ヨナのしるしと悔い改めの証し

「この世代にはヨナのしるしのほか与えられない」

復活のキリストが異邦人の中に現れ、悔い改めを引き起こす。

拒絶した者がしるしを見て嘆き、そして人の子のしるしが雲の上に現れる

ルカ 11 章は、祈りから証しへ、証しから拒絶へ、拒絶から逆転へ、そして終末の顕現へと進む霊的なシナリオです。しるしの本質が証しであり、証しが顕現に至る道である。

それは、花嫁が整えられ、異邦人が悔い改め、拒絶した者がしるしを見て嘆き、そして人の子が雲の上に現れる——御国の完成に向かって憐れみと証しのなされる場です。